

モルズワース夫人の児童書における挿絵画家(1)

— ウォルター・クレインを中心に —

依岡道子

Illustrators in Mrs Molesworth's Children's Books (1) :

Walter Crane

Michiko YORIOKA

I

モルズワース夫人 (Mary Louisa Molesworth, 1839-1921) の挿絵と挿絵画家について考察する前に、モルズワース夫人が生きたヴィクトリア朝後期の児童書の全体的状況を把握しておく必要がある。イギリスにおける1860年代は、「児童文学の黄金時代」(“The Golden Age of Children's Literature”)と一般に言われている。*The Oxford Companion to Children's Literature* の編者として知られている H. カーペンター (Humphrey Carpenter) は、その著書『秘密の花園』(*Secret Gardens*, 1985) の序論で、「児童文学の黄金時代」を「ルイス・キャロルから A. ミルンまで」(The expression ‘Golden Age’ is often applied to the period of English children's books from Carroll to Milne, ...) (Preface) と言っている。ルイス・キャロル (Lewis Carroll, 1832-1898) の『不思議の国のアリス』(*Alice's Adventures in Wonderland*, 1865) が雑誌 *Punch* ですでに有名であった J. テニエル (John Tenniel, 1820-1914) の挿絵をつけて出版されたが、イギリスでは1830年代からすでに挿絵が流行し始め、挿絵が新しい風を出版界に送り込んでいたのである。ルイス・キャロルが挿絵に注文をつけたにせよ、あのアリスという少女の「こわい目」、トランプの女王に食ってかかる時のアリスの気の強そうな顔は、純粹無垢で愛らしいことが理想とされるヴィクトリア朝の少女のイメージを覆すものであった。『不思議の国のアリス』の文字テキストと挿絵は見事に調和し、挿絵は天才作家のイマジネーションによるノンセンスの世界を生き生きと読者に開示し、挿絵が読者に与える影響力の強さを印象付けたのであった。

ルイス・キャロルと同時代のジョージ・マクドナルド (George MacDonald, 1824-1905) の『北風のうしろの国』(*At the Back of the North Wind*, 1871) には、アーサー・ヒューズ (Arthur Hughes, 1823-1915) の挿絵がつけられているが、先のアリスの場合と同じようにこのファンタジー作品においても、長い髪をなびかせた北風の女神がその豊かな髪で衣のようにダイヤモンド少年を包む挿絵は、作品への読者のイマジネーションを膨らませるのに大きく貢献している。

文字テキストに挿絵がつけられたのは何も児童書に限ったことではなかった。画家と作家が協力して小説や詩集が挿絵入りで出版されたのは、大人の文学についても同じであった。ジョージ・エリオット (George Eliot)、チャールズ・ディケンズ (Charles Dickens) 等々、多くの作家の小説に挿絵がつけられており、当時、比較的名前の知られていた画家がそれぞれ特徴のある挿絵を描いていた。挿絵が流行したのにはそれなりの理由があり、それにはヴィクトリア朝

の始めから幾つかの文化的、教育的変化が互いに影響しあったことが窺える。

イギリスにおける挿絵の歴史を見てみると、18世紀においては、初版から挿絵が入っている書物は稀であり、19世紀の初頭において挿絵が幅をきかすようになったようである。平田家就氏はその著『イギリス挿絵史』の中で、「ヴィクトリア朝（1830年代）からイギリス挿絵は全盛時代を迎えることとなる」（93）として、その理由を2つ挙げている。1つには、教育が普及することにより、小説という形態が大衆の読書の対象として広まったこと。また1つには、産業革命のもたらした印刷技術の進歩で、絵画の複製の技術が短時間に多数の複製を可能にしたことである。印刷術の発達により書物の大量生産が可能となり、従来の手刷の方法とは比べものにならない時間短縮が可能になった。それにより新聞などの発行部数が飛躍的に増大していったが、さらに、それを読む読者層の増大を見たのである。初等教育の普及は、一般の人々の識字率を高め、当然書物の購買力を引き上げたが、それは単に書物に止まらず、比較的安価で入手可能な雑誌の発行を促すことになったのである。1860年代から1875年頃まで、多種多様な雑誌が発刊された。そのような多様な雑誌の多くは、挿絵入りのものであった。グレソン・ホワイト（Gleeson White）はその著書 *English Illustration: "The Sixties," 1855-70* (1897) の中で、1860年前後に出版された挿絵つきの雑誌に関して、それらの雑誌の特徴からその中に載せられた挿絵と挿絵画家まで詳細に記述している。

その雑誌名だけでも数えきれないが、例えば、1860年代の雑誌としては *The Cornhill Magazine*, *Good Words for the Young*, *Once a Week*, *Sunday Magazine*, *The Quiver*, *London Society*, *Atalanta*, *Aunt Judy's Magazine*, *Chamber's Journal*, *Little Folks* 等々枚挙に暇がない。多くの雑誌には小説が挿絵つきで連載されていて、それが後に1冊の本として出版されたりすることもあったようである。例えば、モルズワース夫人の場合には、1889年出版の *Neighbours* という小説は、雑誌 *Atalanta* において1887年10月から6回にわたり掲載されたものであった。彼女の多くの短篇や長編が *Aunt Judy's Magazine*, *Child's Pictorial*, *Contemporary Magazine* などの雑誌に掲載されて、後に別の出版社から一冊の書物として出版されたのである。このような経緯のもとにヴィクトリア朝の児童書に挿絵が多く挿入されたのであり、それにともない児童書における挿絵画家の存在を見過ごすことができなくなってきたのである。

II

この論文では、モルズワース夫人の児童書に見られる挿絵と挿絵画家についてその特徴を論じることになるが、先ずヴィクトリア朝後期に活躍したモルズワース夫人が児童文学のいかなる位置にいた人物か、そして、その作品の全体的な特徴について見ておく必要がある。

彼女は約100冊という多作で知られているものの、現在イギリスで出版されているのは『カックコー時計』（*The Cuckoo-Clock*, 1878）他数冊くらいである。当時の流行作家であったにもかかわらず、イギリスの *The Dictionary of National Biography* に記載されることもなく、また、過去において彼女の作品の批評や研究論文もほとんど書かれていない。彼女の没後は、彼女の作品が読まれることが少なかったのである。しかし、モルズワース夫人の作品には、その「語りの方」や「ヴィクトリア朝の少女像」など興味のある研究課題が見いだされ、再評価がなされてもよいとかねてから考えてきた。それらの点については別の機会に考察することにして、今回はモルズワース夫人の児童書に見られる挿絵を取り上げ、彼女の多くの作品に挿絵をつけた挿絵画家について研究することにした。モルズワース夫人の児童書には、すべて挿絵が描かれ

ており、挿絵画家の数は30名に及んでいる。モルズワース夫人の児童書における挿絵画家の中でも、この論文ではその(1)として、ウォルター・クレイン (Walter Crane, 1845-1915) について述べるが、その他の挿絵画家については共同研究をしている木原貴子が同じ論題でその(2)において述べている。

Ⅲ

モルズワース夫人には彼女とほぼ同時代の作家であるユーイング夫人 (Juliana Horatia Ewing, 1841-85) やバーネット夫人 (Frances Hodgson Burnett, 1849-1924) と比較して、明らかに彼女の伝記が少ない。いろいろの作家の伝記を書いているグリーン (Roger Lancelyn Green) は、その著 *Tellers of Tales* (1946) の中で、モルズワース夫人と彼女の友人であるユーイング夫人を比較し、ユーイング夫人が児童書の“classic”になっているのに対して、モルズワース夫人がそうになっていないことについて次のように言っている。

Had Mrs Molesworth died before 1900, there is little doubt that similar honour would have been paid to her, and that she would have come in time to be even more famous than Mrs Ewing. But, though she ceased writing after 1911, she lived until 1921, was the author of exactly a hundred and one books, and died at a time when things Victorian were held in derision. (104)

ユーイング夫人と比べて作品の質については遜色はなく、モルズワース夫人の作品への傾倒者は多かったのであるが、彼女が筆を置いた後、少し長く生きていたこと、また、彼女の子どもたちや知人が彼女の伝記を書こうとしなかったことが彼女の作品が後世に忘れられる結果になったのであろうとグリーンは言っている。彼女は101冊も書いているのであるから、駄作はたくさんあるだろうが、楽しんで読むことができる作品は初期の作品を中心に1ダース以上あるとも言っている。

モルズワース夫人の作品は一般的にはいかに受け取られていたのであろうか。彼女は「お話し上手」で知られていたということであるが、“the Jane Austen of the nursery” と呼ばれていたことがあるらしい。グリーンはモルズワース夫人の成功について次のように言っている。

The secret of Mrs Molesworth's outstanding success lies partly in the fact that she may be said to have attempted less and achieved that slightly lower aim far more perfectly and completely. Outstanding is the absolute authenticity and conviction of her creation of settings and characters and, at her best, an excellent gift of plot-construction. Then reader, old or young, is caught up completely into the world which she is describing: the small hopes and fears, joys and sorrows, of childhood seem for the moment as vital and important as the greater problems of adult life in even the finest novels. (105)

モルズワース夫人の成功の秘密は、彼女が高邁な目標を掲げ、完璧さを追求したりしなかったことにある。しかし、物語の場面設定や登場人物の創造、プロットなどの信憑性や説得力は見事であり、読者は老いも若きも彼女の描く物語世界に引き込まれると言っている。モルズ

ワース夫人の描く子どもの世界には、子どもの持つ小さな希望や恐れや喜び悲しみなどがあり、それは優れた大人の小説に描かれる人生の諸々の困難な問題と同じくらいのものであると読者に感じさせるところがあると指摘している。

モルズワース夫人は若い頃から物語を書き始めたらしく、10代の頃には雑誌にいくつかの物語が掲載されていたようである。子どもの頃、毎年、スコットランドの祖母を訪ね、祖母にお話をしてもらったということであり、モルズワース夫人の“storyteller”の才能は、祖母に負うところが大きであったと言われている。しかし、モルズワース夫人は最初は大人向けの小説の作家として **Ennis Graham** というペンネームで数冊の小説を書いたのであった。子どもの本を書くきっかけになったのは、ノエル・ペイトン卿 (Sir Joseph Noel Paton, 1821-1901) の勧めによるとされているが、彼女が小説を書き始めたのは大人の小説であり、モルズワース夫人は本来、子どもの本を書くことを目標にしたのではなかった。

モルズワース夫人の子どもの本の第一作 *Tell Me a Story* (1875) は評判が良かったが、この本が出版されるに至った経緯を振り返って、誌上で彼女は次のように言っている。“I don't know that I should have thought of publishing the stories I wrote for my children if it had not been for suggestion of my friend Sir Noel Paton,” she remarked in the *Westminster Budget*, 20 October 1893 — この引用は *DLB* 135-p.229からのものである。) *Tell Me a Story* をマクミラン社に送ったところ、受け取られ、それ以来、18年間毎年1冊をクリスマスシーズンに出版する契約が成立したのであった。こうして、彼女の初期の子どもの本はそのほとんどがマクミラン社から出版された。彼女の作品の出版リストは本論文の最後に添付している。

IV

モルズワース夫人の約100冊の作品の中に、数冊の大人のための小説があるが、それらを除いて全ての子どもの本に挿絵がつけられている。挿絵画家は30人に達しているが、その中には数名の女性挿絵画家あるいは名前の知られていない二流の画家も含まれており、挿絵は多彩なものになっている。しかし、モルズワース夫人がマクミラン社から児童書を出版することになった第1作から第11作まで連続してウォルター・クレイン (Walter Crane, 1845-1915) によって挿絵がつけられ、最終的にはクレインの挿絵のついたものは、15冊に及んでいる。ウォルター・クレインはこの当時、挿絵画家としてすでに世評が定まっていたのであり、マクミラン社がモルズワース夫人の作品を世に売り出そうとしてクレインに挿絵を委嘱したのは成功であったと言えよう。

ウォルター・クレインはモルズワース夫人の子どもの本に挿絵をつけることになった経緯を *The Work of Water Crane* の中で、次のように簡単に触れている。

The series of stories by Mrs. Molesworth was commenced about 1875, by Messrs. Macmillan, and I was invited to do the illustrations — a set of seven to each and a title-page device. The first was “Tell me a Story,” and the series is now quite a large one. (7)

クレインはマクミラン氏から委嘱されて、彼女の児童書に各冊とも7図の挿絵と1枚のタイトル・ページの図案を入れることになり、1875年から1889年に描いている。その当時、彼はす

で Routledge 社から「トイ・ブック」(“Toy books”)の挿絵を引き受けていた。

ウォルター・クレインは細密画家 (miniaturist) トマス・クレインの息子として、リヴァプールで生まれた。木版画家 (wood engraver) リントン (William Linton) のところに弟子入りし、また、リントンのパートナーであるスミス (Orrin Smith) から版木に絵を描くことを学んだ。後には、木版師で印刷業者である E. エヴァンス (E. Evans) と出会い、1860年代と1870年代の間に彼とともに余り価格の高くない「トイ・ブック」(玩具本)の製作を始めた。最初は、幼児向けの安っぽい絵本で、精彩を欠き、安易な方法で手彩色がほどこされていたが、次第にクレインの絵本は、力強い輪郭とどっしりとした黒の量塊を使って(日本の浮世絵版画の影響とされているが)特徴的なものになった。クレインは幼児向けの挿絵画家として知られていたが、その他、テキスタイル、壁紙、カード、カレンダー、タイル等々デザイン全般に関わっていた。デザイン全般に関する教育的活動もおこない、当時のアート・アンド・クラフト運動の中心にいたり、1883年にはウィリアム・モリス (William Morris, 1834-96) の Socialist League にも加わった。<装飾芸術>が永遠に<純粹芸術>たる<絵画>の下位に止まるのを嫌って、<装飾芸術>の名誉を復活させようとしたのがこのアート・アンド・クラフト運動の考えである。その運動の理論的指導者であるモリスと考えを同じくするクレインは、マンチェスター美術学校で講義をし、実践的なデザイナーである体験を生かして、数冊の著書も残している。

先に述べたように、19世紀に入って、読者層の増加と印刷技術の進歩によって書物が大量に生産されるようになったものの、全体的に書物は温かみを失い、無味乾燥なものになっていった。そこで商業主義による書物の生産の在り方に抵抗して手作りの書物を作る運動が始った。ウィリアム・モリスは印刷技術に関心を持ち、1891年にケルムスコット・プレスを創設し、活字と図版と書物デザインの問題意識を明確にし、芸術家の立場から問題に取り組んだ。彼らは活字のデザイン、ページの上の活字の配置、書物の装飾、挿絵などを中心に、ケルムスコット・プレスで理想を追い、実践したのであった。

クレインの挿絵の特徴の1つは、黒いくっきりとした輪郭の縁取りにあった。彼は日本の版面に興味を抱き、また、当時活躍していたウィリアム・モリスの影響も受けていたので、クレインの挿絵は、全体的に、装飾的でしかもデザイン的であった。彼の挿絵は、当時人気のあったコールデコット (Randolph Caldecott, 1846-86) の挿絵とは全く趣を異にしていた。コールデコットの描く対象が田舎の普通の人々の自由な動きを描写する風景であったが、クレインの対象は都会の上層中流階級の人々が中心で、人々の外観がデザイン化され、動きが静止した感じが強い。どちらかと言えば、冷たく静的な印象を与える挿絵である。そういったクレインの挿絵はモルズワース夫人の作品の持つ雰囲気とかなり共通するところがあると思われる。

モルズワース夫人の児童書に見られるクレインの挿絵からその特徴を幾つかの項目に分けて見てみる。なお、クレインの挿絵はこの論文の8-11頁に掲載されている。

◎人物描写 — モルズワース夫人の作品に描かれるのは上層中流階級の子どもや娘が多い。

- ・子どもといっても幼児が多く、幼児の挿絵には特徴がある。丸い顔・大きな目・丸々としてふっくらした手足。(図1、図2、図3)参照。
- ・子どもたちの表情としては、物思いに沈んだ表情、考えている表情、ニコニコ笑っている笑顔が少なく、むしろ子どもたちは無表情に近い。(図2、図3、図4)参照。
- ・動作は活発でなく、静的である。(図4、図7、図8)参照。

◎挿絵の背景 — 背景がきちんとレイアウトされている。

- ・小道具の使用 — 子どものいる風景を演出すべく汽車のおもちゃや人形を入れる。
(図3、図4、図7) 参照。
- ・家具や調度品(カーテンやソファや飾り棚)の意匠が細部に及ぶ。(図4、図5) 参照。
- ・動物を入れる — カラス、牛、鶏、亀、猫などを子どもの相手あるいはデザイン的に取り入れる。(図2、図12、図14、図15) 参照。
- ・ジャポニズムの影響 — 小道具のうちわ、和服のような衣服を着た妖精。(図6、図10) 参照

◎口絵(frontispiece)とタイトル・ページのバランス。

- ・見開きの左右のページにバランスよく挿絵を載せる。(図1) 参照。ほとんどすべてのクレインの挿絵のある本には、口絵とタイトル・ページのレイアウトが読者の興味を引くように配慮されている。
- ・本のページのデザイン・レイアウトの重視と活字を手書きの文字にする。(図6、図7) 参照。

◎ファンタジー作品の扱い — ファンタジー作品は少ないが、クレインの妖精の外観は2種に分けられる。

- ・デザイン的美をもつ妖精の翼と衣裳。(図8、図9) 参照。
- ・小さな妖精の異国風の衣裳。(図10、図11) 参照。

モルズワース夫人の作品に見られるクレインの挿絵の特徴は以上のようなものであるが、特に、クレインの子どもの描写には、全体的に喜怒哀楽の生き生きした表情が稀薄であると言える。それはモルズワース夫人の作品の内容そのものと関係があると思われるが、彼女の小説の子どもは、多くの場合、静かに穏やかで感情を表面に出さないというヴィクトリア朝の両家のよい子に求められるタイプであるためではないだろうか。

文学作品の挿絵の評価はどのようになされるかということであるが、このことについてエドワード・ホドネット(Edward Hodnett)は、*Five Centuries of English Book Illustration* (1988)の中で、次のように言っている。

The degree of success of a literary illustrator must be measured first of all by how effectively his or her designs convert the author's words into complementary images. . . . On the whole, English illustrators, particularly those who have made their living by illustrating, have been men and women of modest views of their own importance. They have generally aspired to do three things; (1) represent accurately the characters, incidents, and settings of scenes from the works entrusted to them in a way that makes clear what is taking place; (2) convey through the expressiveness of their drawings the emotional effects evoked by the words of the author; and (3) make drawings interesting, and provide pleasure additional to that of the text. Only during the past century has decorative harmony of the illustrations with the rest of the book been a conscious concern of English illustrators.

Keen sensitivity to literature distinguishes a true illustrator from other artists. (3)

よい挿絵とは単にうまく描けているというのではない。挿絵は文字テキスト中の人物、出来事、場面などを正確に伝えるだけでなく、その当事者の感情面の描写も求められる。さらに、挿絵が楽しみを与えることも必要とされている。ファンタジー作品などの挿絵は、想像上の世界を読者により直接的に訴えるものであるから、挿絵画家の責任は大きい。クレインの挿絵は黒白の描写による力強さと図中の構成の堅実さが特徴であると考えられるが、挿絵の中の人物の動きに変化が乏しく、子どもに楽しさが伝わりにくい。個性的ではあるが、彼が特に優れた挿絵画家であるとは言い難い。

クレインは挿絵の歴史を中心にした『書物と装飾』(*The Decorative Illustration of Books Old and New*, 1896)を出版している。この本の中心的テーマはテキストの字体、レタリングと彩飾画・装飾・挿絵の調和というものであった。クレイン自身、白黒の挿絵の影響を受け、白黒のグラフィズムを評価しつつ、世紀末グラフィック芸術・イラストレーションの〈絵画性〉重視と〈装飾性〉無視を批判している。19世紀末の書物に見られる活字は単調であるとみなしていたクレインは「活字のデザインとページ上の活字の配置」を重んじたのであった。彼はこの本の中で、「現代の印刷術と活字に対してモリス氏が挑んだ戦いは、現代の挿絵の風潮にも向けられた。ケルムスコット・プレスから出版された書物に見られる大胆な白黒の装飾、開かれた線が生み出す装飾的木版画は、写真製版技術から生まれる異状なまでの希薄さ、雰囲気、薄もやのかかったようなボカシと陰影の効果を狙った現代風挿絵に対する抵抗でもあったからである。現代の挿絵はたしかに本文の図解(イラストレーション)をするかもしれないが、書物の装飾にはとてもなっていない。」(247)と言っている。このことは要約すれば、クレインが理想と考え、書物の模範としていたのは、中世の彩飾写本で、書体、縁飾り、欄外装飾、飾り頭文字など総合芸術として有機的に統一された書物であった。書物のトータル・デザインを目指していたクレインが、モルズワース夫人の児童書の挿絵でどの程度理想を達成できたのかは分からないが、モルズワース夫人の作品に見られるクレインの挿絵は、読者にとっては極めて印象的であり、新鮮に映ったことであろう。この時代を代表するディケンズの作品の挿絵画家であるクルックシャンク(*George Cruikshank*, 1792-1878)のように描写力があり、その風刺的で滑稽味のある挿絵とは、趣を異にするが、モルズワース夫人の文字テキストが上層中流階級の子どもを対象とする児童書であるという点を考えるとき、クレインの挿絵はその役割を十分に果たしていると言える。「書物の挿絵は、同時に装飾でもなければならない」というクレインの理想がモルズワース夫人の児童書の挿絵にもある程度表現されていると言えよう。

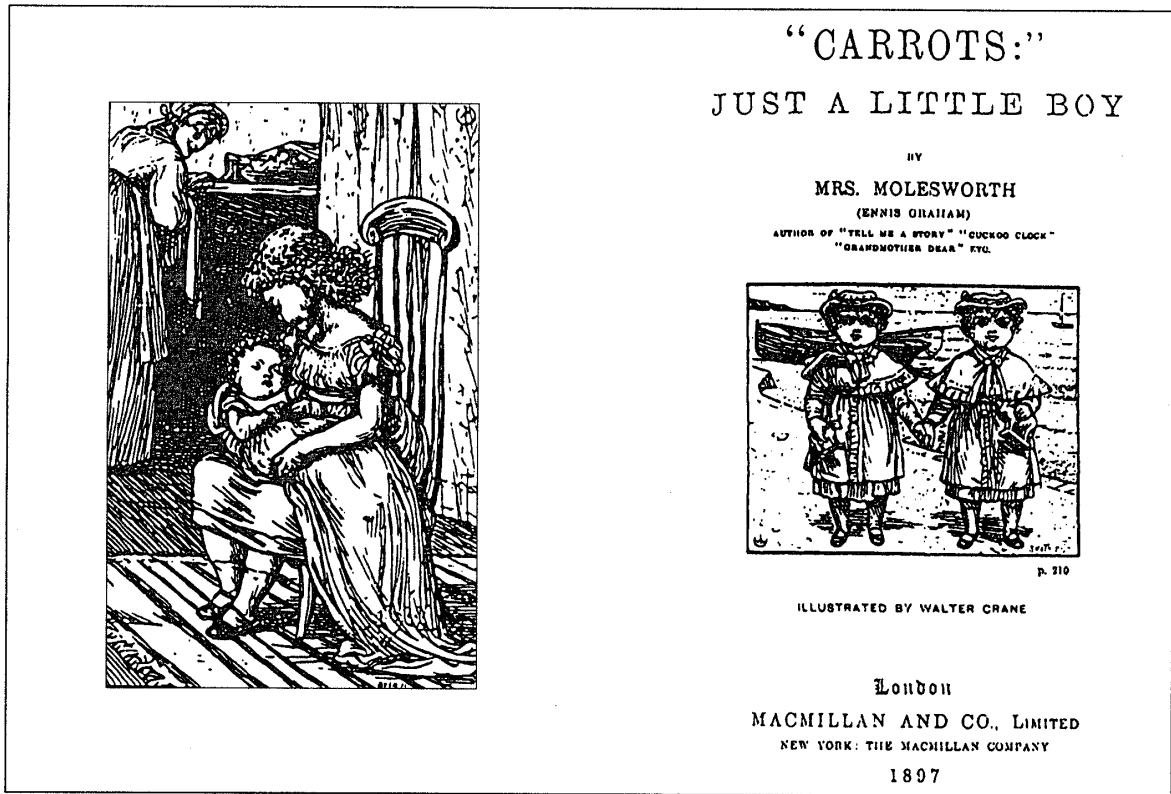


図 1

“Carrots:” *Just a Little Boy* (Macmillan, 1897) より



図 2



図 3

The Adventures of Herr Baby (Macmillan, 1880) より



図 4

Rosy (Macmillan, 1893) より



図 5

Two Little Waifs (Macmillan, 1883) より



図 6

Little Miss Peggy (Macmillan, 1887) より

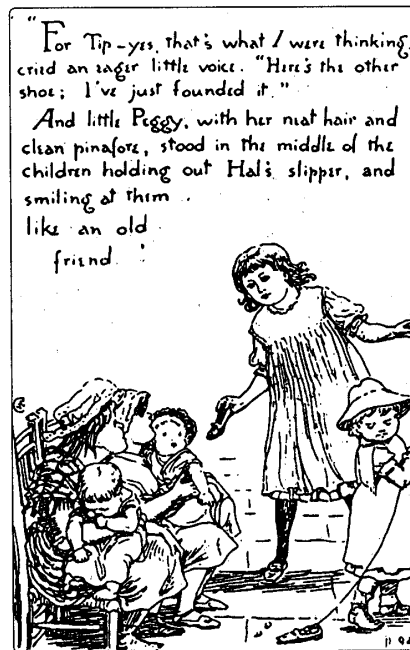


図 7

"For Tip—yes, that's what I were thinking," cried an eager little voice. "Here's the other shoe; I've just founded it."
And little Peggy, with her neat hair and clean pinafore, stood in the middle of the children holding out Hal's slipper, and smiling at them like an old friend.

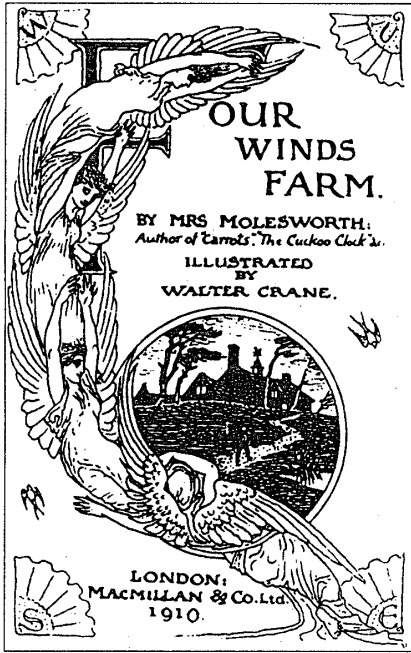


図8



図9

Four Winds Farm (Macmillan, 1910) より



図10



図11

Tell Me a Story (Macmillan, 1875) より



図12

Us: An Old-Fashioned Story
(Macmillan, 1899) より



図13

The Cuckoo Clock
(Macmillan, 1896) より



図14

The Tapestry Room (Macmillan, 1878) より



図15

References

- 平田 家就 『イギリス挿絵史』東京：研究社出版、1995年
- ウォルター・クレイン 『書物と装飾 — 挿絵の歴史』東京：国文社、1991年
- J. ヒリス・ミラー 『イラストレーション』東京：法政大学出版局、1996年
- Carpenter, Humphrey, *Secret Gardens: The Golden Age of Children's Literature*. Boston: Houghton Mifflin, 1985.
- Carpenter, Humphrey and Prichard, Mari, *The Oxford Companion to Children's Literature*. UK: Oxford University Press, 1987.
- Doyle, Brian (compiled and edited), *The Who's Who of Children's Literature*. London: Hugh Evelyn, 1968.
- Goldman, Paul, *Victorian Illustration*. England: Scolar Press, 1996.
- Green, Roger Lancelyn, *Tellers of Tales* (Revised and enlarged edition). London: Kaye & Ward, 1969.
- Hodnett, Edward, *Five Centuries of English Book Illustration*. England: Scolar Press, 1988.
- Horne, Alan, *The Dictionary of 20th Century British Book Illustrators*. London: Antique Collectors' Club, nd.
- Houfe, Simon, *The Dictionary of British Book Illustrators and Caricaturists 1800-1914*. Woodbridge: Antique Collectors' Club, 1981.
- Laski, Marghanita, *Mrs Ewing, Mrs Molesworth and Mrs Hodgson Burnett*. London: Arthur Barker, 1950.
- Muir, Percy, *Victorian Illustrated Books*. London: Portman Books, 1989.
- Peppin, Brigid & Micklethwait, Lucy, *The Dictionary of British Book Illustrators — The Twentieth Century*. London: John Murray, 1983.
- Reid, Forrest, *Illustrators of the Sixties*. London: Gaber & Gwyer, 1928.
- Salway, Lance, *A Peculiar Gift*. London Kestrel books, 1976.
- Thesing, William B. (ed), *Dictionary of Literary Biography — Vol. 135: British Short - Fiction Writers, 1880-1914: The Realist Tradition*. Gale Resarch, 1994.
- Whalley, J.Irene & Chester, T. Rose, *A History of Children's Book Illustration*. London: John Murray, 1950.
- White, Gleeson, *English Illustrators — The Sixties*. Constable 1897.

APPENDIX: LIST OF MRS. MOLESWORTH'S WORKS

NOTE: Up to and including *The Cuckoo-Clock* Mrs. Molesworth's books were published under the pseudonym "Ennis Graham."

TITLE	PUBLISHED BY	DATE
Lover and Husband	—	1870
She was Young and He was Old	—	1872
Not Without Thorns	—	1873
Cicely	—	1874
Tell Me a Story (illustrated by Walter Crane)	Macmillan & Co.	1875
Carrots-Just a Little Boy (illustrated by Walter Crane)	" "	1876
The Cuckoo-Clock	—	1877
Hathercourt Rectory	—	1878
Grandmother Dear (illustrated by Walter Crane)	Macmillan & Co.	1878
The Tapestry Room (illustrated by Walter Crane)	" "	1879
Miss Bouveric	Hurst & Blackett	1880
A Christmas Child (illustrated by Walter Crane)	Macmillan & Co.	1880
The Adventures of Herr Baby (illustrated by Walter Crane)	" "	1881
Hermie	Routledge & Sons	1881
Hoodie	" "	1882
Summer Stories for Boys and Girls	Macmillan & Co.	1882
Rosy (illustrated by Walter Crane)	" "	1882
The Boys and I	Routledge & Sons	1883
Two Little Waifs (illustrated by Walter Crane)	Macmillan & Co.	1883
French Life in Letters	Macmillan's Primary Series of French and German Readings.	1884
Christmas Tree Land (illustrated by Walter Crane)	Macmillan & Co.	1884
Lettice	Christian Knowledge Society	1884
The Little Old Portrait (issued as <i>Edmee, a Tale of the French Revolution</i> in 1915)	S. P. C. K.	1884
Us: an Old-fashioned Tale (illustrated by Walter Crane)	Macmillan & Co.	1885
A Charge Fulfilled	Christian Knowledge Society	1886
Four Winds Farm (illustrated by Walter Crane)	Macmillan & Co.	1887
Silverthorns	Hatchards	1887
Marrying and Giving in Marriage	Longmans & Co.	1887
The Abbey by the Sea	Christian Knowledge Society	1887
Little Miss Peggy (illustrated by Walter Crane)	Macmillan & Co.	1887
The Palace in the Garden	Hatchards	1887
Lost, Stolen or Strayed	—	1887
Four Ghost Stories	Macmillan & Co.	1888
Five Minute Stories	Christian Knowledge Society	1888
A Christmas Posy (illustrated by Walter Crane)	Macmillan & Co.	1888
The Third Miss St. Quintin	Hatchards	1889
That Girl in Black, and Bronzie	Chatto & Windus	1889
Great Uncle Hoot Toot	Christian Knowledge Society	1889
The Old Pincushion; or, Aunt Clotilda's Guests	Griffith, Farran & Co.	1889
Neighbours	Hatchards	1889
A House to Let	Christian Knowledge Society	1889
Nesta	Chambers	1889
The Rectory Children (illustrated by Walter Crane)	Macmillan & Co.	1889
The Children of the Castle (illustrated by Walter Crane)	" "	1890
The Green Casket and Other Stories	Chambers	1890
Twelve Tiny Tales	Christian Knowledge Society	1890
Family Troubles	" "	1890

TITLE	PUBLISHED BY	DATE
Little Mother Bunch	Cassell & Co.	1890
Uncanny Tales	Hutchinson & Co.	1890
The Story of a Spring Morning and other Tales	Longmans	1890
Nurse Heatherdale's Story	Macmillan & Co.	1891
The Red Grange	" "	1891
Sweet Content	Griffith, Farran & Co.	1891
The Bewitched Lamp	W. & R. Chambers	1891
Lucky Ducks, and other Stories	Christian Knowledge Society	1891
Stories of the Saints for Children	Longmans & Co.	1892
Farthings	Wells Gardner & Co.	1892
The Girls and I	Macmillan & Co.	1892
Leona	—	1892
The Man with the Pan Pipes	—	1892
An Enchanted Garden	—	1892
Imogen; or, Only Eighteen	Chambers	1892
Robin Redbreast	"	1892
Studies and Stories	Innes & Co.	1893
The Next Door House	Chambers	1893
Blanche	"	1893
Olivia	"	1893
Mary	—	1893
Thirteen Little Black Pigs, and other Stories	Christian Knowledge Society	1893
My New Home	Macmillan & Co.	1894
Hollow Tree House (with stories by other writers)	Ernest Nister	1894
The Smuggler's Cave (with stories by other writers)	" "	1894
The Story Shop (with stories by other writers)	" "	1895
Sheila's Mystery	Chambers	1895
The Carved Lions	Macmillan & Co.	1895
Opposite Neighbours, and other Stories	Christian Knowledge Society	1895
Friendly Joey, and other Stories	" "	1896
White Turrets	Chambers	1896
Phillipa	"	1896
The Oriel Window	Macmillan & Co.	1896
Stories in Illustration of the Lord's Prayer	Gardner & Darton	1897
Meg Langholme; or, The Day after Tomorrow	Chambers	1897
Miss Mouse and Her Boys	Macmillan & Co.	1897
The Magic Nuts	" "	1898
Greyling Towers	Chambers	1898
The Laurel Walk	Ibister & Co.	1898
The Grim House	J. Nisbet & Co.	1899
This and That, a Tale of Two Tinies	Macmillan & Co.	1899
The Children's Hour	T. Nelson & Sons	1900
The House that Grew	Macmillan & Co.	1900
The Three Witches	" "	1900
The Wood Pigeons and Mary	" "	1901
My Pretty, and Her Little Brother Too	Chambers	1901
The Blue Baby, and other Stories	T. Fisher Unwin	1901
Peterkin	Macmillan & Co.	1902
The Mystery of the Pinewood	—	1903
The Ruby Ring	Macmillan	1904
Jasper; a Story for Children	"	1906
The Wrong Envelope, and other Stories	"	1906
The Bolted Door, and other Stories	Chambers	1906
The Little Guest	Macmillan & Co.	1907
Fairies—Of Sorts	" "	1908
The February Boys (illustrated by Mabel Lucie Attwell)	Chambers	1909
The Story of a Year	Macmillan & CO.	1910
Fairies Afield	" "	1911

from *MRS EWING, MRS MOLESWORTH and MRS HODGSON BURNETT* by Marghanita Laski